東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　29：211～224，2003

ハワイ州の公立学校におけるESLL教育

小林 幸江
(2002.10.31 受)

【キーワード】 ESLL、JSL、Content-basedカリキュラム、Sheltered Instruction、学習言語

1．はじめに

筆者は、2001年から2002年にかけて半年ほど米国ハワイ州に滞在し、ホノルル市を中心に公立学校のESL（English as a Second Language）教育プログラムの現状を調査した。本稿は、その調査結果をまとめたものである。

英語が母語でない学習者のための英語習得のプログラムは、普通ESLプログラムと呼ばれるが、その他にもESLL（English for Second Language Learners)、ESOL（English to Speakers of Other Languages）等の名称で呼ばれている。ハワイ州の場合も教育局（Department of Education）が出している資料ではESLLが使われているが、学校現場では、いろいろな呼ばれ方をしており、名称は統一されていない。以下、本稿では特にハワイ州の場合を述べる時には教育局の名称に倣い、ESLLの名称を用いることにする。

2．調査目的

文部科学省では毎年、公立学校に在籍する外国人児童生徒を対象に、「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」を行っている。平成13年度の資料によれば、その数は19,250人で平成3年の調査開始以来、もっとも多くなっており、そうした子供たちが分散化、散在化する傾向が進んでいる。そうした状況を踏まえ、わが国でもJSL（Japanese as a Second Language）と呼ばれる日本語教育の新しい分野ができつつある。

JSL指導では、日常の生活のための生活日本語と教科学習のための学習日本語が教えられる。生活日本語は数ヶ月から2、3年で習得されるのに対し、学習日本語の習得には5年から7年という長い時間がかかると言われている。教科学習につなげるためにどのように学習日本語を指導していくかは大きな課題となっ

ている。
古くから多くの移民を受け入れている米国では、Content-based Curriculum による学習言語の指導が主流となっているが、実態はどうなのか。本稿は、ハワイ州の公立学校における ESLL 教育事情を調査することにより、我が国の外国人児童生徒の教科学習につなげる手立てを模索しようとするものである。

本稿では、前半は、ハワイ州の ESLL 教育の概況、ホノルル地区の教育委員会（Honolulu District Office）の取り組みを紹介し、後半は、ホノルル市内の中高の ESLL における英語力の限られた児童生徒（Limited English Proficiency の略。以下、LEP と呼ぶ。）に対する教科指導の事例を報告する。その事例を基に、JSL における学習日本語の指導のあり方について考えてみたい。

3 .調査の概要

3-1　対象

本稿では、オアフ島、特にホノルル地区を中心に報告する。この地区は人口が密集し、ESLL 教育を受けている児童生徒の数も多い。多くの問題を抱えながら、地区の教育委員会を中心に熱心な取り組みがなされている。

3-2　方法

ハワイ州、及びホノルル市の ESLL 教育の概況を知るために、教育局、ホノルル地区の教育委員会の関係者に対するヒアリングや資料収集を行った。また、ハワイ大学の Second Language Acquisition Faculty の関係者と意見交換を行うことにより、多くの有益な情報を得た。さらに、学校現場での授業参観を通して、また、筆者自身ボランティアとして ESLL のクラスに入り込むことにより継続的な調査を行った。

4 . ハワイ州の ESLL 教育の概況

4-1現況

ESL が対象としているのは、NEP（Non-English Proficiency）、LEP（Limited English Proficiency）の児童生徒である。こうした児童生徒への Language Support Service は連邦政府の法令によって定められている。この法令では、language minority students の権利、及び学校区の責任も規定している。つまり、ESL プログラムは連邦政府の予算による FEDERAL PROGRAMM として位置付けられている。

米国の他の州では郡政府が教育権を握っている場合が多いのに対して、ハワイ州では、公立学校教育は全州で１本化されているという特徴が見られる。上の法的根拠に基づいて、ESL 教育に関しても、教育局の下に、７つの教育委員会（District Office）が置かれ、きめ細かい対応が為されている。以下、教育局の資料に従って説明する。

4-1-1　ESLL の児童生徒数

ハワイ州にある７つの教育委員会のうち、４つがオアフ島に集中している。その中でも規模が大きいのはホノルル地区の教育委員会で、市内の55の学校を管轄している。これらの小中高に通う子供の数は34,935人で、ESLL の児童生徒はそのうちの約14％を占めている。ハワイ州全体で見れば、その39％がこの地区に集中している。ESLL の児童生徒数は全体的に増加している。（表１）

（表１）ハワイ州の ESLL の児童生徒数（2002）

学校区	学校数	児童生徒数
１．Honolulu(Oahu)	55	4,822
２．Central(Oahu)	40	1,538
３．Leeward(Oahu)	41	2,381
４．Windward(Oahu)	31	490
５．Hawaii	41	1,221
６．Maui	30	1,271
７．Kauai	16	462
State Totals	254	12,185

4-1-2　ESLL の児童生徒の母語

ハワイ州には、さまざまな人種、文化が共生している。ESLL の児童生徒の母語総数は50ヶ国語以上にも及ぶ。南太平洋諸国の言語が上位を占めているが、これはハワイ州の地理的な環境によるものである。それらの国と米国との間には軍事関係の補償等で、特別の協定が結ばれており、往来が比較的自由にできる。そのため、子どもの教育目的でハワイにやって来る人が多い。

フィリピン、中国等、アジアからの呼び寄せによる、移民目的の滞在者も多いが、最近はヴィザ取得が難しくなっている。日本からは従来のビジネス目的に加えて、最近の傾向として、母子留学による長期滞在が増えている。その他、最近は農業関係でペルー等南米からの契約労働者も増えている。

（表２）ESLL の児童生徒の母語トップ10

Ilokano	3,306人	Japanese	461人
Samoan	1,208人	Spanish	447人
Tagalog	983人	Vietnamese	443 人
Marshallese	982人	Tongan	430人
Cantonese	604人	Korean	321人

4-1-3　全校児童生徒数に占める ESLL の児童生徒の割合

ESLL の児童生徒は市の中心または、近郊の学校に集中しており、それらの学校の中には ESLL の児童生徒が全校児童生徒数の20%、30%を占めるケースも多い。中には全校数のほぼ半数を占めるという学校もある。

（表３）　全校児童生徒数に占める ESLL の児童生徒の割合トップ10

Palolo El.	47%	Linapuni El.	24%
Kae'wai El.	38%	Jefferson El.	24%
Ala Wai El.	32%	Kaahumanu El.	23%
Kauluwela El.	30%	Kalihi Uka El.	23%
Waipahu El.	29%	Lanakila EL.	23%

上の表からもわかるように、ESLL 児童生徒は主に小学校に集中している。ESLL 教員の加配の割合は小中高によって異なるが、年齢が低いほど加配は多い。LEP の児童生徒22、23人に対して ESLL の担当１人というのが平均的である。

１クラスの児童生徒数は５人程度というのが ESLL の平均的なクラスであるが、LEP の児童生徒が集中する学校では時間割の組み方を工夫したり、地域ボランティアを活用したり、教師の工夫によりクラスが運営されている。ESLL 教員にクラス Management の資質が求められる所以である。

フルタイムの ESLL 教員は ESLL の資格を持っていることが望ましいとされているが、必須ではない。学校が一時的に雇う ESLL 教員の場合、児童生徒の母語がわかるということが優先され、ESLL の資格は言うに及ばず、教員資格のない人が採用されるケースもある。中には High School の卒業資格を持たない人が雇われている例もある。

その一方で、ワイキキ近くの ESLL の児童生徒が集中するある小学校では、ESLL の教師が中心となって、ESLL プログラムの充実に関して連邦政府の教育

予算を獲得し、全校の教員にハワイ大学の現職者研修コースに参加させ、ESLL教員の資格をとるよう奨励している学校もある。ESLLプログラムの成功の成否はまさに校長、及び周りの教師の理解、そして、担当の教師の熱意にかかっていると言える。

4-2　ハワイ州のESLL教育の2つの問題点

以上の、現況からハワイ州のESLL教育について、2つの問題点を指摘することができる。

①ESLL人口急増と教員不足

ハワイ州は、人口に占める移民人口の割合が米国の中でも高い。特に、地理的な理由から南太平洋諸国からの大量の移民を受け入れていて、その数が近年増加しているのが特徴である。その結果、ESLL人口が急増し、LEPの児童生徒が集中する地域では、1クラスの人数が適正人数を超えているところも多く、教師は対応に苦慮している。ESLL教室には自国で文字教育を受けてこなかった児童生徒が交じっていることもあり、そのような場合には教師の負担はさらに増すことになる。また、ESLLに限らないが、ハワイ州でも教員不足は深刻で、ESLLの資格のない教員が教えている例も多い。

②南太平洋諸国対アジア諸国出身の児童生徒の勉学上のギャップ

ハワイ州では、多少の偏りは見られるが、多くの民族が交じり合って住んでいる。その結果、1つのクラスに教育背景や、学習スタイルのまったく異なる子供たちが共存しているが、教育の現場では南太平洋諸国出身の児童生徒とアジア諸国出身の児童生徒間の勉学上のギャップは大きく、深刻な問題となっている。

5．ホノルル地区の教育委員会の取り組み

5-1　仕組みと役割

ホノルル地区の教育委員会は、ハワイで一番人口が密集し、ESLL人口が多い学校が集中している地域を管轄している。ここには、District Superintendentの下に、5人のResource Teacher、8人のSchool Home Assistantがいる。

Resource Teacherは 地区内にある55の学校を分担して受け持ち、それぞれの学校を巡回し、以下のようなESLLプログラムのサポート、指導、アドバイスを行っている。

・ESLL教育に携わる教員に対する研修、ワークッショップの開催：そこで教授法や子供の心理等について研修を行っている。参加対象者の中には、教科指導の

先生方も含まれている。

・ESLL 教育に携わる教員とのミーテイングの実施：定期的に管轄の学校に出向き、ミーテイングを持っている。

・ESLL の児童生徒の父兄への対応：父兄への説明会が学年の始めと終わりの2回開かれ、ESLL に対する父兄の理解を高めるのに一役買っている。

一方、School Home Assistant と呼ばれる母語通訳者は、父兄と学校、そして、Resource Teacher の間に入って、関係を調整する役目を負っている。それぞれの学校での ESLL 関係の催しの際には、欠かせない存在である。また、ESLL "PARENT LEARNING CENTERS"を開催し、父兄たちに英語を指導している。

5-2　取り組み

ホノルル地区教育委員会の独自の取り組みとして、以下のものがある。

①"English for Second Language Learners Program"の作成

これは、ホノルル地区の ESLL Program に関して父兄向けに平易に解説したパンフレットである。

②受け入れから送り出しまでのマニュアル作成。

以下にその内容を簡単に説明する。

入学を許された児童生徒で、英語が不自由な子供はまず、ESLL 教室へ行き、そこで Language Proficiency Test を受ける。ホノルル地区では、BINL (Basic Inventory of Natural Language) TEST を受けさせている。これはいろいろな写真を見せて、教師の質問に答えさせたり、説明させたりして、子供の英語力を測定するものである。その結果はカリフォルニアにある BINL の本部で電算機処理され、各校に返送される。英語力により5つの段階に分けられ、レベル1、2は NEP、3から5は LEP とされ、それぞれのレベルに応じた指導が始められる。毎年4月に行われる達成度を見る標準試験が行われる。ホノルル地区では、MAT (Metropolitan Achievement Test) を採用している。MAT では Reading、Comprehension、Language (Math, Science, Social Study の3教科の内容に関する質問) の力を測定する。このテストは言語テストと、学年の学力を見る achievement test の性格も併せ持っている。それぞれ25%をとれば、ESLL プログラムは修了と見なされる。ただし、ぎりぎりで合格した者については、1年はモニターが行われる等、きめ細かい対応がなされている。関係者の話では、現状の25%の合格基準もかなり高いハードルのようである。近い将来、ハ

ワイ州では米国の他の州並みにMATの合格基準を各項目30%に引き上げることも計画されているが、学校現場からは反発の声も大きく、教育委員会はその対策に頭を抱えている。

③ Student Record Profile 作成

ESLLの受け入れ時の記録から始まって、ESLL教室での児童生徒の英語の学習状況、伸びに関する細かな記録等さまざまな情報が記録されている。これは、転校時に新しい学校へのスムースな引継ぎを図るよう作られたものである。ただし、地域が異なるとシステムが変わるため、どこでも同じ内容が引き継がれるわけではない。

5-3 ホノルル地区のESLL教育の特徴と問題点

ホノルル地区のESLLプログラムの特徴及びそれから生じる問題点として、次の2点が挙げられる。

① Multi-cultureをポジテイブにとらえ、それを尊重した教育を行っている。

学校の中、ESLLクラスの中に多文化が共生しており、指導・行事の中に各国の文化紹介等、多文化教育の視点が積極的に取り入れられている。しかし、ホノルル市でも実際の教育の場では増え続ける南太平洋諸国の児童生徒の勉学態度に違和感を感じている教師は多い。

② ESLLプログラムは、"Whole language philosophy"に基づき、Language acquisitionとCommunication skillsの習得を目指す。これは、従来の文法や単語から言語を学ぶという方法とは異なり、意味のあるコンテクストの中で全体的なまとまりとして言語を理解、獲得していくというものである。バックグラウンドや英語のレベルが異なる学習者を対象とし、しかも、英語漬けの環境の中にあっては有効な手段と言えるだろうが、ESLL担当の教員が足りないこともあって、実際は必ずしも効果的に授業がなされているわけではない。さらに、National Standardの基準達成が求められている現在、basic studyの必要性も言われ始めている。

6．ホノルル地区の中高におけるESLL教育の事例

ホノルル地区の公立学校では、ESLLプログラムはコミュニケーション・スキルを中心に英語を学ぶESLL教室だけでなく、"Sheltered Instruction"(注1)で教科内容を学ぶ教科クラスが含まれることがある。後者は、J content class（以下、Jクラス）と呼ばれている。LEPの生徒はこのJクラスで教科内容を学びなが

ら学習言語を学ぶ。JクラスはESLLの生徒数が多い学校に設けられている。ただし、小学校では教科は、原則として母学級で学ぶことになっているので、Jクラスは設けられていない。Jクラスで教えられる科目は学校によって異なる。

本稿では、市内にあるPresident George Washington Middle SchoolとWilliam McKinley High SchoolのJクラスにおける教科指導を中心に報告する。この2校は、ワイキキ、ダウンタウンにも比較的近く、市の中心部に隣接した地域にある。それぞれ長年にわたって熱心な取り組みをしている。

事例はうまくいっている例と問題がある例を取り上げる。ただし、後者の事例については、特定できないように簡単な説明にとどめる。

6-1 President George Washington Middle School（以下、W.M.）の例

6-1-1 W.M.のESLL教育（2001年の資料による）

W.M.は1924年に創立された。6年生から8年生まで923人の生徒が在籍している。そのうちESLLの生徒の数は116人となっている。ESLLの生徒の出身国トップ5は、マーシャル群島、ベトナム、中国、韓国、ミクロネシアの順である。生徒の母語数は17言語に及ぶ。W.M.におけるESLL教育は、ESOLと呼ばれ、専任、非常勤各1人、ボランティア2人で英語指導が行なわれている。生徒は毎日1コマ50分の英語指導を受けている。

W.M.にはホノルル市の中学校でただ1校、LEPの生徒のためにすべてのcoreの科目についてJクラスが設けられている。しかし、6年生については学校の方針で英語の環境に慣れさせるためJクラスは設けずに、ESLLクラス以外はすべて普通クラスで授業を受けている。7、8年生になると、Social Study, Science, English, Mathの4教科についてJクラスがあり、"Sheltered Instruction"で授業が行われている。LEPの生徒は英語力によって、beginners class、advanced classに分けられる。

6-1-2 事例

①うまくいっている授業例

7、8年生の数学beginnersクラスの例を紹介する。このクラスは、日本、韓国、中国、南太平洋諸国の出身者12人からなり、生徒の英語のレベルは低い。数学の内容は、regular classとほぼ同じ内容で進む。この授業では、Prime No.とComposition No.の考え方を指導していた。

1）割り算の文章題のプリント（中学生が使うことを考慮し、先生が市販の小学生用算数ドリルを切り張りし、絵を消し文字を縮小したもの）を配布する。まず、

全体で音読させ、答えを書かせる。
2）次に、7年生用の数学のテキストを開かせる。まず、Prime No.とComposition No.の新しい言葉の意味と数学の考え方を指導する。それが理解できたら、問題を与え、解答させる。解答はまず、口頭で言わせてからノートに書かせる。
3．テキストの問題をやらせる。先生はその間、教室を回ってわからない生徒に解説したり、質問に答えたりする。

先生の英語はゆっくりめで、発音明瞭で聞き取りやすい。新しい言葉を教える時は、あらかじめ黒板に書かれた図式を指し示しながら教える。

問題の解答では、アジア系と南太平洋諸国で差が出てしまった。英語力によりクラスが編成されているので、アジア系の生徒の中には、数学の力はあるが数学の英語が弱いということでこのクラスに配置されている者もいる。そのような生徒には、わからない生徒に先生の代わりに教えさせている。ほとんど何も聞けず、話せなかった生徒も2ヶ月経って、じっと黒板を見て考えるようになってきたとの先生の話である。担当の先生は、regular classでも数学を教えている。教える内容は、どちらもほぼ同じだが、LEPの生徒に教える際には教材、及び説明の仕方等工夫しているとのことである。

②問題のある授業例

Beginners のためのScienceの授業例を紹介する。先生は、前期の授業を動植物を中心としたReadingの時間と位置付けている。そこで、動植物が出てくる絵本を教材として使っている。生徒に幼児用の動物や草花の塗り絵に色を塗らせている間に、1人ずつ5分ほど絵本を読ませ、発音を注意していた。ハワイに来てまだ間もないという生徒もいて、読み方はおぼつかないが、中学生に対しては適切な教材とは言いがたい。心理的な面だけでなく、絵本には擬音語・擬態語が多く、それをいくら習っても教科学習には結びつかない。7年生の生徒から、「これはScienceなんかじゃない。」と不満の声が聞かれた。Jクラスでの指導にあたっては、教材の適切さと、生徒にとって達成感のある授業を目指すことが重要と言えるだろう。

6-2　William McKinley High School(以下、M.H.)における教科指導

6-2-1　M.H.のESLL教育（2001年の資料による）

M.H.は1907年に創立された。以前は、日系人の生徒が多数を占め、東京High.と呼ばれていたこともある。9年生から12年生まで1,845人の生徒が在籍している。そのうち、ESLLの生徒の数は324人となっている。ESLLの生徒の

出身国トップ3は、中国、マーシャル群島、フィリピンの順である。生徒の母語総数は22言語に及ぶ。M.H.には、ESLL Department があって、LEP の生徒の英語指導と教科指導を行っている。専任は3人いて、2人が英語を指導し、他の1人は Social Study を指導している。その他、非常勤4人、ボランティアが3人いる。M.H.では、LEP の生徒のために、English, Social Study, Science の3科目について、Jクラスが設けられており、それぞれレベル別の授業が行われている。その他の科目は、普通クラスで受ける。1コマ90分で、時間割は1日おきに変わる。

6-2-2　事例

①うまくいっている例

9、10年生の beginners のための World Geography の授業の例を紹介する。南太平洋諸国、フィリピン、中国、日本出身の17人の生徒が受講している。授業開始後半年ほどの間に、中国や南太平洋から6人の転校生が入ってきた。先生は、ベトナム人で元留学生とのことである。クラスには、M.H.の生徒が助手として入っている。その他、日本語のボランテイアが1人授業を手伝っている。生徒の英語力は、さまざまでアルファベットもわからない生徒がいる一方、1段上のレベルのテキストを使っている生徒もいる。この授業では、Longitude と Latitude について指導していた。

1．'longitude 、latitude、plateau、gulf、plains'等地理に関連した語彙を黒板に書いて説明する。説明の英語は語彙がコントロールされ、スピードもゆっくりめで、聞きとりやすい。

2．新しい語を用いて、ブラジルの地理を紹介する。

3．ワークシートを配布し、世界の主だった都市の Longitude と Latitude を資料を使って調べさせる。その間に、先生、助手、ボランテイアは生徒の中を回って個別指導をする。この授業は、その後、関連のビデオを見せ、また、図書館に場所を移し地図を使って世界の町の Longitude と Latitude を調べさせる等、2回続いて行われ，最後に、学習した内容について、テストが行われた。

World Geography の授業は、テキストの順番に従ってアメリカから始まって、ヨーロッパ、アジアの国々の地理的特徴を学習する。1つの国、または地域は2コマで終了する。授業は、[学習する国、地域についての簡単な説明の後、地図を書かせる→用語説明→ビデオを見せる→各自でワークシート完成→宿題（テキストの各課の「質問」）→前回の復習→テスト] と毎回パターンが決まっている。

授業のほとんどの時間は、ワークシート完成の作業に当てられる。その意味では、「うまくいっている例」に入るか疑問であるが、生徒の英語力に差があり、個別指導にならざるを得ないという状況があるのも事実である。結果として自力でテキストや資料を使い答えを探し出すという訓練が積み重ねられることになり、読む力を養成することにつながっている。この授業で用いられているテキストはESLLの生徒用に開発されたもので、各章の構成がパターン化されていて、読みやすく、読み進むうちに地理の英語が自然に身につくようになっている。この授業では、授業の流れのパターン化、自発学習、そして何よりも教材が効果を生み出す秘訣となっている。

②問題のある例

Beginnersのための Englishの授業では、30人ほどの生徒が受講している。担当の先生は、M.H.の English Department所属の先生で、High SchoolのESLLの生徒に教えるのははじめての経験である。事情があって急遽、担当に指名されたという経緯がある。

この授業は、内容に一貫性がないというのが問題である。作文を書かせ、発表させたかと思うと、突然、英語力の低い生徒だけ外に連れ出し、身の回りの単語を教えるだけで終わる。しかし、次には政治問題に関して意見を書せたりする。また、be動詞や助動詞について練習したかと思うと、授業中ずっと映画を見せ、感想を言わせて終わる。また、パーテイーの準備で終わってしまうといった具合である。この授業は、学習目標も見えず、決まった教材もなく、毎回の授業の関連性がない。授業内容も生徒の英語のレベルを考慮したものとは言えない。

6-3　Jクラスについて

Jクラスには、次のような評価すべき点がある。

1．英語力が限られた生徒でも、Sheltered Instructionで科目のコンセプトが停滞なく学習できる。意欲がある学習者であれば、通過点として有効な方法である。

2．周りは同じ英語力の人たちで心理的プレッシャーが少ない。

3．英語の程度に合わせ、テキスト、クラスが変わるので、生徒は自分で英語力の伸びが実感できる。

一方で、次のような問題点も指摘できる。

1．JクラスはESLLに属するものであるが、担当する教師がESLLの資格を持っているとは限らない。LEPの生徒に教えた経験がなかったり、その指導に関心がない場合には生徒に不満を残す授業となりやすい。

2．Jクラスは普通クラスへの移行期のクラスと位置付けられるが、Jクラスでそのまま卒業を迎えるケースも多い。JクラスはESLLの生徒を対象としているが故に、学力の低いクラスと見られがちで、意欲のある生徒にとっては意欲をそがれることになりやすい。
3．上に見たW.M.とM.H.では、ESLLとJクラスの授業がそれぞれ独立して行われていて、相互の関係が希薄である。例えば、EnglishとESLLの英語指導について見てみると、特に、beginnersの場合、双方の授業で内容が重なることが多い。授業が同じ日にある場合には、1日に2回も同じことを習うこともある。また、同じ時期にJクラスとESLLクラスで同じビデオを見て、感想を書かせられたり、内容の重なりはよく見られる。
4．Jクラスの beginnersクラスには、英語力がゼロに近い生徒も交じっている。そのような生徒に対しては、生徒の母語を話すボランティアが授業中そばについて学習を手助けしたり、放課後、ボランティアによる補講を行って学習を支援している学校もある。しかし、ESLLの生徒数が多い場合には、そのようなケアーも難しく、教室で授業中、ただ座っているだけというケースも多い。

ここでは、特に4の問題点について検討してみる。

W.M.とM.H.のESLLでは英語力がゼロに近い生徒に対しても、英語を初めから教えることはない。生徒は英語の中に放り込まれ、英語漬けの状態の中でさまざまなアクティヴィティーを通して、自然に英語を獲得していく。自然に近い状況で英語が身につき、有効な方法と思われるが、これには長い時間がかかる。また、周りの支援も欠かせない。中高の生徒はほぼ母語が確立した年齢にある。そのような生徒に対しては、システマチックな指導も可能である。効率を考えると、特に初めの段階にはそのようなシステマチックな英語指導は必要と思われる。英語力がゼロに近い状況ではせっかくのJクラスの授業も無意味なものとなってしまう。何もわからず座っているだけの生徒の苦痛は想像に余りある。基礎的な英語力があれば、Jクラスでの学習の道も開かれる。具体的に言えば、日本の中学1年程度の英語力があれば、受身や使役、現在完了等の文法の知識がなくても、周りのサポートがあれば授業についていける。

以上のことから、LEPの生徒が教科の授業についていくためには、次のような指導の流れを考えることができる。

基礎的な英語のシステマチックな指導→ESLLでの総合的な英語指導／Jクラスでの教科指導→MAT合格→普通クラス

Jクラスの授業を効果的に行うためには、基礎的な英語力は不可欠と思われる。

7．JSLにおける学習日本語の指導のあり方を考える

以上のことを踏まえて、最後にJSL指導について言及してみよう。

JSL指導の場合、児童生徒の在籍期間を見ると、「2年以上」の者が4割を占める一方で、「6ヶ月以上1年未満」の者が増加する傾向にある。移民を対象とした米国のESL教育とは事情が異なる。短期滞在の児童生徒の場合、帰国後に備え教科は母語による学習が最優先されるべきと思われる。学習日本語の指導にあたっては、児童生徒の滞在期間を考慮に入れることも必要であろう。

長期滞在の児童生徒の場合、進学の問題があり、教科の学習は欠かせない。そこで、母学級での教科指導に入る前の移行期段階で、『JSLカリキュラム』(注2)のように、“Sheltered Instruction”で教科の内容を学びながら、学習言語に慣れ、それを習得していくのは必要な課程である。しかし、そのためには、基礎的な日本語力は欠かせない。そのために、JSLカリキュラムでは、来日初期はまず、基礎日本語の習得に重きをおき、三カ月をめどに、その後、移行期カリキュラムに入っていくというのが望ましい。

移行期カリキュラムにおける教科内容を中心とした日本語指導では、既知の内容から入り、未知の内容に進んでいく。説明やテキストの表現は簡潔で、同じパターンを繰り返しているものだと理解も容易となり、定着もしやすい。また、指導の際には、教師が授業中にすべてを教えるのではなく、ワークやタスクを課し、自発的な学習を促すことも重要である。

この時期には、教科内容を中心とした日本語指導と同時に、ESLLで行われているような総合的な日本語指導も欠かせない。未習語の入った短い話を読んだり、聞いたり、ある内容について発表したり、作文を書いたり、さまざまなアクティヴィティーを通して、日本語のレベルアップを目指す。双方は補い合う関係にあるといってよい。移行期カリキュラムにおいては、このように総合的な日本語指導と教科内容を中心とした日本語指導が並行して指導されていくことにより、学習言語の習得が促進されるものと思われる。

8．おわりに

筆者は、平成10年に出された『外国人子女の日本語指導に関する調査研究《最終報告書》』では、「小学校用日本語指導カリキュラム・ガイドライン―適応場面

を利用して」の作成に参画した。その後、科研を得て、その教材化を図った。次の段階として、学習日本語の習得に取り組もうとしている。今回の調査はその基礎資料を得る目的で行われた。この結果を今後の研究に反映させていきたい。

最後に、ハワイ研修の機会を与えてくださった、センターの同僚の皆様、また、ハワイ大学の聖田京子先生にここで深く感謝の意を表します。また、ハワイでの調査研究のため、時間を惜しまず協力してくださった多くの友人にも深く感謝の意を表します。

注1　ESLで広く行われている教授法。英語力の限られた生徒が理解しやすいようにコントロールされた英語で教科内容を教える。
注2　東京学芸大学が中心になって開発した移行期カリキュラム。限られた日本語でも学びを経験させるという考えに基づき、教科内容を中心に、学習日本語を指導することを目指す。

参考資料

小野博、赤堀司「アメリカ、カナダにおけるESL教育事情に関する調査」『外国人子女の日本語習得課程に関する学際的基礎研究及び教育開発プログラム開発研究』」1981

Department of Education Hawaii ESLL Student Population 2001 Department of Education English for Second Language Learners 1995

Department of Education Comprehension Assessment and Accountability System School Year 2000-01 2001

Haward L. Fleischman and Paul J. Hopstock Descriptive Study of Limited English Proficient Students 1993 U. S. Department of Education

Margret A. Winzer, Kasper Mazurek SRECIAL EDUCATION IN MULTICULTURAL CONTEXTS 1998 Merril Prentice Hall Pub.

Angela L. Carrasqullo and Vivian Rodriguez
LANGUAGE MINORITY STUDENTS IN THE MAINSTREAM CLASSROOM 1995 Multilingual Matters Pub.

Current Situation on ESLL Education in Hawaii

KOBAYASHI, Yukie

The Japanese society has been internationalizing at a rapid rate and as a result, the number of foreign- born children attending Japanese schools has also been growing. Students who attend public institutions and need Japanese language education are increasing yearly, and it has been reported that there are around 20 thousand such students as of September 2001 (Monbu Kagaku Sho, 2002). Under such circumstances, Japanese Schools have been coping with such situations.

The purpose of this paper is to 1) report on the current situation of ESLL education for foreign-born students who have limited English proficiency, 2) provide some suggestions which may lead to solve some of the issues related to the instruction of Japanese for subject matter studies. The second issue is related to the "sheltered instruction" which is popular in the field of ESL.

Documents and materials used for this research include books related to the issue of education for foreign-born children, materials published by Department of Education、and Honolulu District Office. First-hand information about the English language education for foreign-born children was obtained through class observations, and hearings from ESLL teachers.